

132 明治15年1月2日 菊池長閑宛

(長閑注記)

第一号 明治十五年一月二日

新年を御祝ひ申上候昨日ハ実に好天気にて如何にも奥めかしく年始や見物に出る人夥く随て市中も賑はしかりし当地の風にて元日の朝ハ箒払除もせず例日よりハ晩く起るなれとも元日から朝寝房するも何たか気に食ねハ蚤起せる相談なりしかとも三十日の夜ハ何角用^{（角）}ありて十二時頃始て打臥たる勢欻相替らす東京風をやらかし十時頃漸く屠蘇酒を飲始め雑煮餅を食たり鳥肉か牛肉のスープを拵ひ夫に餅を打込たなら嘸甘い雑煮か出来るたるふと考付相談したる所牛肉ハ臭いと云ふ女共の故障が起り廃案となり終に鴨と極りて拵たるが西洋料理を心得ぬ下女の事

ゆへ矢張吸物風に遣付たれハ私の思た丈汁は甘からず今朝より猶云付て骨や皮杯を能く煮出し煮詰させたれハ可なりに風味出来たり私の家にては右を家例と致す積なり外くたゞしき事ハ女ともより可申上けれハ略す十一時頃より出掛たるに余り天氣宜けれハ車に乗も勿体ないと存し橋場までごつ／＼歩行通し歸りにハ一条と道連となり出来心に任せ浅草見物をしやれ先鳥渡奥山の手品芸を見(礼服を着けないで)夫より写真を取らせ果ハ本堂に昇ておみ闍を頂たら私にハ小吉と云ふくじか当りたれとも一条へハ凶か抜たる故頂かねは宜つた杯同人つゞやきながら観音前より同車にて西小川町へ赴たり夫が大隈へ立寄竹橋より半蔵へ抜永田町の大木殿へ手札を置虎の門を出芝口二丁目迄又候歩行したれハ随分宜き運動なりし伊勢源にて三好退蔵の開たる宴会に招かれ夜の十時頃まで酒席に連なり歸りて見れハ本宿兄弟四人に同人妻の弟と五人居たれハ西洋カルタ杯遊て十二時近く寢床に就たり今朝早々より火事かと□る計り人の騒ぎ立れハ何事やらんと思たるに初荷と唱て諸問屋より得意先へ始めて売品をくばるなりキャリを謡ひなから日の丸の旗杯にて飾りたる大八車を牽行事此時より昼迄幾度となく見掛たり今夜ハ男女の客十余人来りて歌骨牌を取積又明日ハ朝から那珂の家にて師範学校の女生徒并先生連か歌カルタを取から来いと招かれたり余の時ならハ私も一生懸命にて遣へけれとも大学の仕事を叩て忙き故甚迷惑なり左なから噪敷からよせと云ふ訳にも行す内の丈ハ勤め那珂のハ断る積なり転宅以来便利ハ至極宜く新富座ハ近し十二ヶ月汁粉屋を始め喰物類の善のは側に沢山ある故一寸

(長閑注記)

〔十五年一月十一日達ス〕

芝居の覗きやら買物の帰路に汁粉屋杯へ駈込にハ余り都合か宜
 過ぎ偶稀にハ迷る人も有様子なり珍敷て面白いと見えぬちや波
 ハ毎日の様に出歩行今迄尻を叩ねは出ぬ人達とハ丸て人か変た
 様に見ゆ家の裏に地藏堂ありて中々流行神と見得時々縁日あ
 り其夜ハ家の前通りに植木屋小間物屋等か夜店を張大想な賑い
 又角を廻ると銀座通にハ毎夜出店打並ひ古道具を始め古物類を
 売る野菜類ハ大抵夜店にて求る由安直(やす)にてよし又龍の口の卸工
 場に倣たる店ハ家に近き銀座通り三軒計りあり諸品を商ふ右の
 有様故卸工場の見廻り夜店のひやかし杯に女共ハ毎日毎夜の様
 に出るのハ宜けれと物好心を出されてハ私の迷惑一方ならねは
 右の廉をハ始より堅く断り置たり道具類を好む方にハ調法な所
 なれとも懐の勘定をする日にハ甚た悪い場所なり此暮の賑ハ大
 想(おも)にて日本橋より銀座に続き松飾屋小間物屋瀬戸物ヤはこ板屋
 古着古道具屋館屋杯張見世打並別て夜ハ往来人の郡集(ぐんじ)一方な
 らず構はぬ流義の私迎も一二度夜見世を見廻りたり」司法省へ
 ハ近く遂車も乗たるなし去とも大学へ通ふにハ矢張車に乗ねハ
 叶間敷車代の入るにハ閉口なり」横田の義は委細承知同人の見
 込ハ未だ直に聞ぬが本家の話や御手紙の趣なれハ至極宜やに思
 はる」レールも大概御用尽の頂かにも考ふれハ幸便次第可成
 当月中に下し上へき心組」親類衆へハ何時もの如く無沙汰可致
 けれハ御序に宜く御伝話を希ふ」澤田氏より端書一二度送り呉
 たれとも別段用もなき故手紙を遣ねハ同人并惣八殿へもよろし
 く

父君

武夫